

# 忘れてしまつて 立原道造

深い秋が訪れた！（春を含んで）

湖は陽にかがやいて光つてゐる

鳥はひろいひろい空を飛びながら

色どりのきれいな山の腹を峡の方に行く

葡萄も無花果も豊かに熟れた

もう穀物の収穫ははじまつてゐる

雲がひとつたつたつながらて行くのは

草の上に眺めながら寝そべつてゐよう

私は ひとりに とりのこされた！

私の眼はもう凋落を見るにはあまりに明るい

しかしその眼は時の祝祭に耐へないちひささ！

このままで 暖かな冬がめぐらう

風が木の葉を播き散らす日にも——私は信じる

静かな音楽にかなふ和やかだけで と

◆出典 『立原道造全集 第一卷 詩集一』（角川書店、一九七一年）

## 秋日口占 三好達治

われながく憂ひに栖みて  
はやく身は老いとすらん

ふたつなきいのちをかくて  
愚かにもうしなひつるよ

秋の日の高きにたちて  
こしかたをおもへばかなし

すぎし日の憂ひならねば  
あまからぬこの歎きかな

見よ彼方

日は眞晝

藍ふかき海のはるかに  
眞白なる鷗どりはも

一羽ゐてなに思ふらん  
波の穂にうかびただよふ

願はくばわが老いらくの  
日もかかれ 世の外にして

つたなかる心ひとつを  
いだきつつわが來し旅の

ゆくすゑをいゆきたどらん  
よしやえし西も東も

今はとてかへるすべなき  
これはこれ旅にしあれば

相模野の野のすゑつかた  
おしなべてものはおとろへ

われひとりかくつゞやくに  
風高し端山艸山

# 秋の夜

宮本百合子

月そそぐいずの夜

揺れ揺れて流れ行く光りの中に

音もなく一人もだし立てば

萌え出でし思いのかいわれ葉

瑞木となりて空に冲る。

乾坤を照し尽す無量光

埴の星さえ輝き初め

我踏む土は尊や白埴

木ぐれに潜む物の隈なく

黄朽ち葉を装いなすは

夜光の玉か神のみすまるか

奇しき光りよ。

常珍らなるかかる夜は

炫耀郷の十二宮

眼くるめく月の宮

瑠璃の階 八尋どの

玉のわたどの踏みならし

打ち連れ舞わん桂乙女

うまし眉高く やさめの輝き

長袖花をあざむけば

天馳つかい喜び誦し

山祇もみずとりだまも

ともに奏でん玉の緒琴 箏の笛

妙なりや秋の夜

心ゆく今の一とき

久遠劫なる月の栄え

讃えんに言の葉も得ず

いずのみお我辺かこむ。

## 秋の日の下 梶井基次郎

秋の日の下、物思いの午後、芝生の上。

取り出せるは、皺になれる敷島の袋、

残れる一本を、くわえて、火を点ず、

残れる火を、さて敷島の袋にうつす、

秋の日の下、物思いのひるさがり、芝生の上、

めらめらと、袋は燃ゆらし 灰となりゆく、

あわれ、我が肺もこの袋の如、

日に夜に蝕まれゆくか、

秋の日の下、くゆらす煙草のいところらし。